



アマドコロ

Polygonatum odoratum Druce var.
pluriflorum Ohwi

アマドコロは、明るい森林内に群生して生育するユリ科の植物で、葉に白斑のあるものをフィリナルコユリとよび庭園のグランドカバー（地被）に用いられる。

薬用には萎蕤（イズイ）と称し、滋養強壮、増血剤、解毒剤に用いる。

根茎は、太くて硬くヒゲ根が多いことからトコロ（ヤマイモ科）に似ており、またかすかに甘味があるのでアマドコロの和名がついた。

この変種にヤマアマドコロ、オオアマドコロがある。

カラフトヒゲナガカミキリ 山林火災跡地に異常発生

1987年5月8日、東筑摩郡四賀村に山林火災が発生し、多くのアカマツが焼失、枯損しました。そして火災跡地ではアカマツ被災木を増殖源としてカラフトヒゲナガカミキリが異常発生しました。本種が異常発生した事例はあまり知られておりませんが、ここでカラフトヒゲナガカミキリとはどのような昆虫か紹介します。

1. カラフトヒゲナガカミキリとは

本種はマツノマダラカミキリと同属のヒゲナガカミキリ属で、カミキリムシ科、フトカミキリ亜科に属している昆虫です。カラフトヒゲナガカミキリとマツノマダラカミキリは一見よく似ていますが、よく見るとその違いは表-1に示すように鞘翅の色彩はカラフトヒゲナガカミキリは黒っぽく、マツノマダラカミキリは白っぽくみえます。

生態はマツノマダラカミキリのそれとよく類似しており、成虫が若枝をかじる状態、産卵方法、幼虫が樹皮下組織を摂食する状況および材表面に穿つ穿入口の形などにはマツノマダラカミキリとの間に差違がみられません。そのうえマツノザイセンチュウを保持していることが明らかにされ、最近になってマツ材線虫病の媒介者になり得ることが実証されております。このため、今後マツノマダラカミキリ以外の昆虫に対する防除を円滑に推進させるためにも、本種の分布や生態などはマツノマダラカミキリ同様、十分に把握されていない状態になってきました。

表-1. カラフトヒゲナガカミキリとマツノマダラカミキリの区別点

種名	区分 寄生樹種	成虫		幼虫	
		体長	鞘翅の色彩	体長	色彩
カラフトヒゲナガカミキリ	アカマツ、クロマツ カラマツ、ヒメコマツ	11~20	黒に明るい枯れ 葉色の斑紋が散 在	30前後	乳白色
マツノマダラカミキリ	アカマツ、クロマツ	18~30	暗赤褐色に灰白 色の斑紋が散在	30~40	乳白色



図-1. 長野県におけるカラフトヒゲナガカミキリと
マツノマダラカミキリの分布 (1988)

2. 分 布

本県におけるカラフトヒゲナガカミキリの存在は、すでに古くから知られており、「長野県のカミキリムシ」(1976)や「図説長野県のカミキリムシ」(1981)によると松本市入山辺、上伊那郡高遠町・長谷村、下伊那郡天竜村・大鹿村、木曾郡開田村、南安曇郡安曇村などで蒐集家によって採取され、図-1に示すような分布が確認されておりました。

四賀村に山林火災が発生し多くのアカマツが被害を受けました。この被災木に寄生していたヒゲナガカミキリ属を1988年の夏に調べたところマツノマダラカミキリは全く認められず、すべてのものがカラフトヒゲナガカミキリでした。したがって、現在カラフトヒゲナガカミキリの生息が確認されている地域は、前述の七市町村に四賀村を加えた八市町村となり、また、このうちマツノマダラカミキリの生息が確認されているのは天竜村だけです。

3. 生 態

(1) 成虫の羽化脱出時期

ヒゲナガカミキリ属が多く寄生していた被災

木を1988年4月19日に採材(1.5 m長)し、丸太は直ちに当センター構内の林内に設けた屋外網室内(標高870 m)に立てかけ、発生状況を把握するための調査を1日1回ずつ行いました。

この結果、羽化脱出した成虫128頭の発生消長は図-2に示すように、その初発日は5月26日、50%羽化脱出日は6月4日、終日は6月12日で発生期間は18日間でした。この発生消長の結果は標高700 m付近で採取した丸太を870 mに移して調べたものですが、採材した付近の火災跡地では5月9日に成虫が確認(松本地方事務所林務課、山岸技師による観察)されています。

成虫の羽化脱出時期は、暖かい地方ほど早い傾向が見られ、初発日は近畿および関東地方では5月上旬ころ、北陸や東北地方では5月中～下旬ころで、50%羽化脱出日は近畿および関東地方で5月中旬ころ、北陸や東北地方では5月下旬から6月上旬です。終日は近畿および関東地方で5月中～下旬、北陸や東北地方では6月中～下旬となっています。

このようにカラフトヒゲナガカミキリの脱出

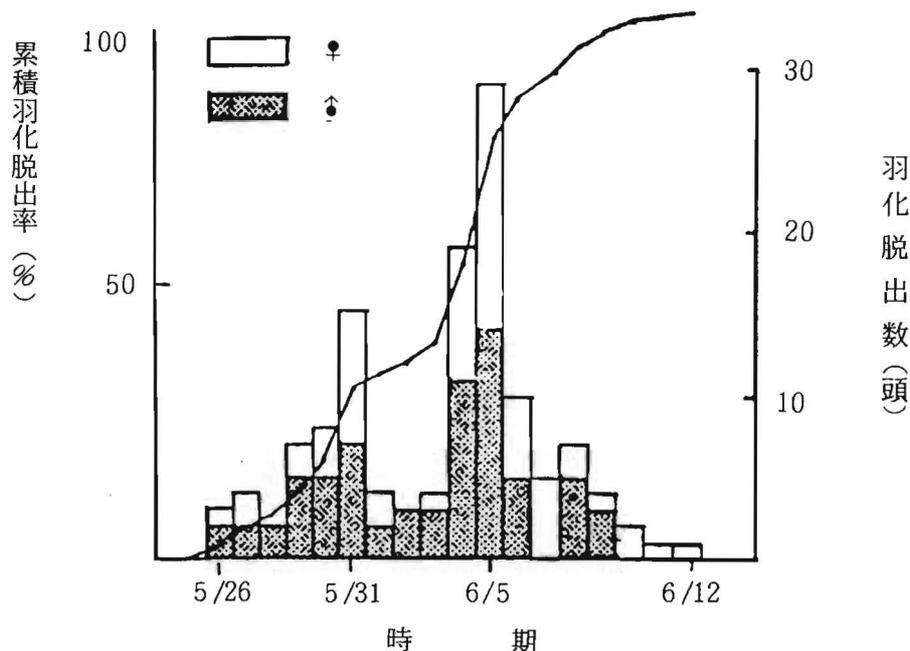


図-2 カラフトヒゲナガカミキリの発生消長

期間は20日間前後であって、マツノマダラカミキリのそれよりも短いことが特徴です。

(2) 成虫と蛹室、脱出孔の大きさ

成虫は枯損木から円形の孔を穿って脱出します。大きさなどについては、表-2・3および図-3に示しました。

(3) 寄生部位の樹皮厚

カラフトヒゲナガカミキリが寄生していた部位の樹皮厚をみると、いずれも5mm以下のところで、樹皮の厚いところには寄生が認められませんでした。また樹幹の太さが2.8cm(剥皮したもの)の梢端に近い箇所脱出孔(孔径4.5mm)が認められました。これらのことから、本種はマツノマダラカミキリ同様、樹皮の薄い部分または比較的太い枝に寄生する習生があるものと考えられます。

4. 今後の課題

松くい虫による被害の防除対策を講ずるうえからカラフトヒゲナガカミキリをみると、本種の発生時期はマツノマダラカミキリよりも約1か月早いので、本種が生息している地域での松くい虫防除の薬剤散布は1か月早く実施しなければならないこととなりますが、現在のところ幸いにも長野市や上田市で調査を行ってきた被害材にはカラフトヒゲナガカミキリの寄生は全く認められておりませんので、早期の薬剤散布の必要はありません。しかし被害を防止するためにもマツノマダラカミキリとカラフトヒゲナガカミキリが混在する地域で松くい虫による被害が発生した場合には、マツノマダラカミキリとカラフトヒゲナガカミキリはセットで考えていかなければならないでしょう。

表-2 材内における蛹室の位置関係

丸太の 大きさ	区分	調査数	脱出孔径			脱出孔の長さ			材表面から孔道上壁までの距離			穿入孔から脱出孔までの距離		
			最小	最大	平均	最小	最大	平均	最小	最大	平均	最小	最大	平均
			mm	mm	mm	mm	mm	mm	mm	mm	mm	mm	mm	mm
未口5cm未満		24	3.2	6.0	4.74±0.65	2	12	5.54±2.32	5	25	15.83±4.94	3.5	9.5	6.01±1.75
未口5cm以上		110	3.6	6.4	5.02±0.47	1	18	4.71±2.63	5	50	17.17±6.79	2.5	18.0	6.40±2.53

表-3 カラフトヒゲナガカミキリ成虫の大きさ

区分	雌雄別	個体数	体長		
			最小	最大	平均
		頭	mm	mm	mm
♂		66	10.0	18.5	14.55 ± 1.58
♀		56	12.1	18.0	15.68 ± 1.36

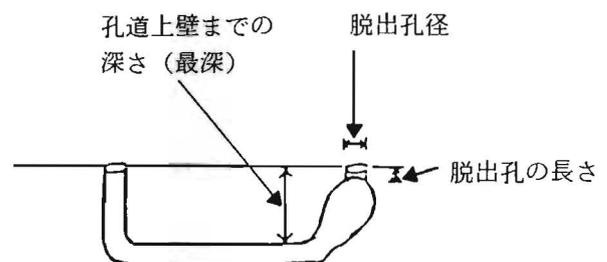


図-3 蛹室周辺の測定位置

(育林部 小島)